

狂気と正気、そして五十代

阿部 頼政 あべ よりまさ

▶日本大学 理工学部 土木工学科 教授 工博

「腸癌、長くて3ヶ月の生命」と診断された。25歳であった。手術後、白い枕カバーは抜け落ちた髪の毛で毎朝真っ黒になっていた。死を覚悟しながらも、子供がいないこと、学者のたまごとして、活字になったものがないということが何とも残念であった。せめて50歳まで生きられたらよかったのと思った。1ヶ月後、「検査の結果、特殊な病気であることがわかった。しかし、良性なので生命に別状はない。」と説明された。信用できなかった。退院手続き後、病院前のそば屋にとびこんで酒をがぶ飲みした。婚約者（現女房）は何も言わなかった。今五十代、この病気が前から潜んでいた狂気に拍車をかけたように思う。

私は福島県の片田舎に生まれ、中学3年までそこで過ごした。何の産業もない貧乏な海辺の町で、現在では原子力発電所が出来ている。小学生の頃から餓鬼大将を気取り、上級生と闘ってはよく血だらけにされた。中学校に入ってからには楯突くものもなくなり、ずっと番長を通した。ただ、小学校では母が同じ学校の教員をしており、中学校では父が教頭であったため、表向きは真面目な生徒であった。中学1年の終わり頃、模擬試験があり、学年でトップになった。自分でも意外であったため、それから夢中で勉強するようになった。中学3年では福島県下で殆ど毎回トップをとるようになった。

父に、高校は東京に出してくれと頼んだ。日比谷高校に行きたかったが、「教員としてインチキはできない。全国から募集する東京教育大付属に合格したら出してやる。」と言われた。無事合格した。卒業式には、卒業生代表、優等生代表に選ばれ、各校

男女1名ずつの中学校体育連盟賞、皆勤賞をもらい、「仰げば尊し」のピアノ伴奏を受け持った。すべて順風満帆の時であった。

上京して高校に通い始めてから、田舎の山猿であることを思い知らされた。眩しいような女生徒から「ちょっと喋ってごらんなさいよ」と方言をからかわれた。スポーツ、趣味、評論等、いろいろな面で自分をはるかに優れている同級生がいた。地方出身者が珍しかったせいか、女生徒の誕生パーティによく招かれた。服装、プレゼント、食事のマナーなど、何もかも身のすくむ思いであった。勉強だけが頼りで、黙々と学校、下宿の往復を続けた。大学は東京大学文科I類を受験した。不合格であった。小学校以来12年間、無遅刻、無欠席で努力した結果はみじめであった。学問に裏切られた感じがした。浪人時代はもう勉強する気にはならなかった。映画館をハシゴしたり、公園で昼寝をしたりして、ひたすら受験日の来るのを待った。文科I類よりも難関であるという単純な理由から理科I類を受験した。今度は合格したが何故か虚しかった。

学問に対する不信感はますます募った。大学入学後、すぐに空手部、囲碁部、書道部、哲学研究会に入った。麻雀も覚えた。個人の腕で勝負する世界にあこがれた。授業に出る時間的余裕はほとんどなかった。生活はかなり豊かになった。高校時代の先生の紹介で、住み込みの家庭教師を頼まれたからである。空腹を我慢する必要はなくなった。暇ができると夜は下駄履きで新宿歌舞伎町の暮会所に通い、酒を飲んでガード下で喧嘩相手をさがした。

部活と麻雀で3年間を過ごした後、ふと、このま

までは世の中に出ても役に立たないことに気がついた。大学院の修士課程に進学した。研究が面白くなってきた。そこで、さらに博士課程に進むことにした。婚約も整い、将来に希望を持ち始めた頃、冒頭で述べた病気になった。博士課程1年の秋であった。

退院後は、いつ再発するかもしれない。その前に博士論文を完成してということしか頭になかった。半年後、結婚した。生活費は女房が稼ぐことになっていた。1年後、脂汗をかくような腹痛が続き、病院にとびこんだ。十二指腸潰瘍との診断であった。病気のうちに入らないと思い無視した。退院してから1年半後、博士課程3年の6月、指導教官の最上先生から、「もう十分、後の半年は寝て暮らせ」と言われた。博士課程終了後、東工大でしばらく助手をしていたが、最上先生が日大に移られて後、日大に呼んでいただいた。

この頃には再発の心配は薄らいだが、学者として生きていけるかどうか自信を持てなかった。各種の委員会に参加させてもらい、「先生」といわれるようになったが、実力のないのは自分が一番よく承知していた。睡眠は世界中から後れをとる罪悪だと思った。大学に泊り込むようになった。学生も家族も邪魔になった。家族から金を取り上げ、単身イギリスに向かった。

TRRLで1年間過ごすうち、気持ち落ちついてきた。研究については、海外のエリート達も同じような部分で行き詰まっていることが分かった。また、彼らが急がず悠々とやっていることに感心した。そして、個人の業績に固執していた自分が嫌になった。日本に帰ったら仲間づくりをしようと思った。

帰国後、日本アスファルト協会にお願いして勉強会を発足してもらった。最初は義理で集まった人が大部分だったため、1年後には出席者3人というどん底になってしまったが、その後徐々に志願者が増え、10年後には述べ100人近くを数えるに至った。一方、土木学会の全国大会では、情報交換、懇親会の同志を募った。最初は賛同者が4人だけだったが、年々参加者が増え、今では150人の参加者となっている。仲間づくりを始めて最も困ったのは資金であった。当時30代前半の私には、官庁や協会からの援助を仰ぐ才覚もなく、企業は怖くて近づけなかった。

たった一つ、自分の腕で稼げると思ったのは麻雀であった。地上げ屋、建築会社社長、ダフ屋などのセミプロ相手に10年間稼いで足を洗った。もっとも、勝負に出かける資金がなくなって、女房の職場まで定期預金の解約金を取りに行くようなこともあったが……。この間、私の経済状態を察知して資金の提供を申し出てくれた人があった。たった一人だけだけに嬉しかった。麻雀をやっていた時期は、論文を一番多く書いた時期でもあった。

44歳で教授になって間もなく、狭心症の発作で倒れた。原因は心臓そのものではなく血液の異常ということであった。血小板数が上限値の10倍以上あり、それが毛細血管を詰まらせるとのこと。また、悪化すれば白血病になり、その時は5年の生命、2ヶ月に一度は検査に来るようにとのことであった。治療法は癌と同じと聞いて足が遠のいた。悪化してから5年もあるなら私には十分であった。ただ、大学の泊まり込みはちょっと気味が悪いので止めることにした。

40代後半からは職場の改革に目を向けた。「よその黙れ」の一言で、10年以上も発言を封じられる状況はどう考えても異常であった。危険を覚悟で何かしなければならなかった。そして行動した。現在では助手の発言でも正論が通るようになった。と同時に私は必要でなくなった。この間に土木学会から「舗装工学」が出版された。私は名ばかりの編集委員長で、すべて仲間と若手がやってくれた。私が夢に見た体制ができあがった。そして舗装の世界でも私の一区切りがついた。

女房にはいろいろ言われた。「ひも」「夢ばかり追っかけて猿より始末が悪い」「イギリスに行くときに家族を捨てた」「我が家は母子家庭、父親がいなくなってもちっとも困らない」……すべて尤もと言うしかない。

自分の人生を50歳までと決めて若いころに描いた夢は殆ど実現できてしまった。途中の曲折は蹉跌であったのか、人生の必然であったのか。生命が続けば定年まであと11年。夢が実現すると新たな夢が見たくなる。今度は家族にも自慢できる夢を見てみたいとも……。

さてどうするか。